早春箋

辻村もと子

青空文庫

まづまづ安着いたしましたこと、ご安心あそばして下さいませ。二日二晩も汽車や船にのりづめでは、臓腑がごちやごちやになつてしまふだらうにと、お母さまはおつしやつて不安さうになさいましたけれど、おもひのほかなんともないものでございます。もつとも初めての長旅なので夫も大変気づかつてくれまして、途中、前便のとほり松島を見物いたし、青森で船のでるのをまつあひだ三時間ほど停車場前の「かぎや」ともうす宿で休み、連絡船で六時間、割合にくたびれもせず、はじめて海を越えた土地につきました。

蝦夷松前などゝ、小田原のひとびとは囚人だけのくるところのやうにもうしてをりますが、どうして、北海道はなかなかひらけたところでございます。ことに函館なぞ、昨年日露戦争が終りましてからは、樺太との連絡にも重要な港となり、外国にでもまいつたやうに立派な西洋館がそろつてをりましてびつくりいたしました。

たゞ青森からはしけで連絡船に移りますときだけは、ほんとうに怖しく、どうなることかと気もそゞろ、しみじみ来なければよかつたとさへおもひました。そのはしけともうすのは小田原の漁船ほどのもので、本船へまいりますあひだ木の葉のやうにゆれるのでございますもの。海をみてはいけない、じつと僕の手をみておいで、と夫はもうしました。私は、いはれたやうにいつしようけんめいあのひとの節の太い手をみつめてをりました。さういたしますと、なんだか、このがんじような手が、私の一生をぎゆつとつかまへてしまつてゐるのだと妙な気持がいたし、たのもしいよりも怖くなつてきてこまりました。お母さまのお手からこのひとに移され、このひとがこれから先の生涯をともにいたすひとなのだとそのときはじめて身にしみて考へられたのでございました。

本船は大きく、それに上等の船室をとりましたので、ちようど応接間にでもをりますやうにお花など飾つてあり船のなかとはおもはれぬやうでございました。でも、小さな円い窓から、内地の陸の影が次第に遠のいてゆくのをみておりましたら、いよいよ、お母さまと同じ陸つゞきの土がふめなくなつたのだと気づき、涙がこぼれてきてこまりました。

でも、夫は大変やさしいひとでございます。なんだか真面目すぎるやうな顔して、気むづかしいひとではなからうかと、ご心配なさいましたけれど、ときどき面白いことをいつて笑はせ、真面目なかほして冗談をもうしますので、びつくりいたします。小樽に下車したときでございました。十二月のさなかなので町はすつかり雪、この雪のこともくはしくおしらせしたいのですが三尺も四尺も雪がつもつたら歩けはしまいとおつしやいましたけれど、立派に歩けますのですよ。しかも下駄ばきで歩けるのでございます。そのかはり、雪がすつかりふみかためられて鏡の面のやうに硬くなつてをりますので、氷の上を歩くと同じなのでございます。はじめて小樽の街でその雪道に出ましたときは、どうにも滑つて歩けずたうとう停車場の前で立往生いたしてしまひました。

夫は私の信玄袋まで持つてくれて、さあ大丈夫だから僕につかまつてお歩き、ともうすのですけれど、ひとさまがみてゐるのですもの、つかまつてなど歩けはいたしません。よろしいのでございますよ、と一足二足あるき出しましたが、軽業の玉のりみたいなのでございます。そばを通る女のひとたちが、なんの苦もなさそうに早足で歩いてをりますのにあきれて、どうしたら滑らないのでございま

せうねときゝましたら、夫は、かゝとに力を入れて大またに歩けばころびはしないよ、と真面目なかほしてもうしますので、私はいはれたとほりにして歩きだしたと思ふとすぐ、みごとに、子供みたいにころんでしまひましたの、すると、夫は面白さうに大笑ひいたすのでございます。正直なひとだ、ほんとうにかゝとに力を入れたんだな、そりや反対なのだよ、爪先に力を入れて、小きざみに歩くんだよ、と、たすけ起し、今度は私の腕をつかまへて歩いてくれました。反対なことを教へるなんて、ずいぶんなひとだと、憎らしうございましたけれど、あのひとがそんな冗談をいふのがおかしく、私より十二も年上の大人なのに、やつぱり子供みたいなところがあるので、ほつといたしました。小樽の町は言葉のあらい、みんなけんくわしてゐるみたいな口のきゝかたをいたすところですが、泣きたいやうに夜の美しい街でございます。

あくる朝また四時間ほど汽車にゆられ、札幌を通り越してやつと夫の村に着きました。村ともうしましたけれど、村といふ言葉ではいひあらはせません。内地の村とはおよそ違ったところ、雪におほはれた原野に、人家がぽつり、ぽつりと二三町も間をおいておき忘れられたやうにあるばかりなのでございます。どの家でも夏になると三町歩、五町歩といふ耕作をいたしますのださうで、その自分の耕地の中にそれぞれ家をたてゝあるために、このやうにはなればなれになつてゐるのださうでございます。

汽車を降りますと、馬橇が迎へにまいつてをりました。箱の下に先のそつた平たい滑り木が二本ついてゐて、馬が曳くのでございます。頬の切れさうに冷たい風をきつて滑つてゆく橇の乗り心地はなかなか愉しく、馬の首についた鈴がチリン、チリンなりますの。この四五日の変化がはげしいので、なにかおとぎばなしの国に連れてゆかれるやうでございました。その馬橇で迎へに来てゐて下すつたのが夫の弟の浩造さまでございました。浩造さまも、そのおつれあひのおまきさまも、よい方たちでございます。おまきさまは、もうこちらにこられてから二年以上になられ、二月には赤さんがおできなさるご様子ですが、すつかりこちらの暮しにお馴れなされて、モンペをはかれ、きびきびとよくお働きなすつてをられます。私も、はやくあの方のやうになれたらよからうと存じます。

その夜、いろいろ用意がいたしてございまして、農場のひとびと二十人ほど集まりご披露の宴会がございました。私はまだ疲れてをりまして、夢のなかにゐるやうでございましたが、おまきさまが、なにやかとお世話下され、おつくりまでしていたゞき、黒の江戸褄で、もう一度婚礼をやりなほしたやうでございました。おまきさまは髪まで上手に島田にあげてくだされ、お祖母さまからおゆづりのあのべつこうの笄と櫛は、みごとなものだとおほめになりました。おまきさまは、私より二つも年上でいらつしやるので、義妹ともうしますよりはお姉さまのやうでございます。

この離れは、八畳が南に三間づゝとならび裏に六畳と四畳の納戸のやうな部屋がございまして、味もそつけもない開墾地風な建てかたでございます。そのうへ、広い土間を中にして同じ棟つゞきが大きな納屋になつてをります。その他、住宅よりもかへつて立派なくらいの馬屋がございまして、こゝにはよい種類の馬が四頭と、緬羊ともうす羊のやうな獣が二頭をります。この毛を刈つて毛糸でも毛織物でもできるのださうでございますが、まだ試みに飼つてみたのださうで、家のひとびとにもよく分らないらしうございます。それ

から、リスとポンチと呼ばれる大きな猟犬が一つがひ。リスはポンチの奥さんなのですが、リスはなかなか旦那さまおもひで、自分ひとりだけでは決してごはんをいたゞかず、皆がわざとからかつて、リスの食器にだけ食物をやりますと、ポンチの空の食器をくはへてまいりポンチの分をさいそくいたすのでございます。それに鶏が十羽ほど。生きものゝ世話だけでも大変なことでございます。

二人の男衆がをりますがこのひとたちは馬屋の二階が部屋になつてゐまして、そこにねとまりいたし、ばあやとその孫娘の小浪ともうすちゞれ毛の少女は母屋の方に住んでをります。それに浩造さま御夫婦と私共、これだけがこの家の家族ですが、みんなさつぱりといたしてをり、なんの気兼もございません。

雪道を歩くにも働くにも、こちらの女のひとたちはモンペと申すモヽヒキのやうなものはいて居りますので、私もあの唐桟の着物をほどき、これからおまきさまに教へていたゞいてこしらへます。夫は冬の中に足ならしをしておくやう明日から山に猟に連れてゆくと申してをります。

ちつとも、心細いことございませんからご安心くださいませ。お母さまの神経痛いかゞでせう。湯の花はお勝手の棚の一ばん右の隅に甘納豆の箱に入つてをります。

お兄さまも、もう冬の休暇でお帰りなされてゞございませう。春江にもどうぞよろしく。

十二月十日　　ちよ

母上さま

新年のお祝詞もうしあげたきり、ずいぶんながくお便りさしあげず、どうしたことかとご案じあそばしてゞありませう。ちよつと風邪をひきぶらぶらいたしましたが、おかげさまでもうよろしく、昨日あたりから起きてストーブのそばで夫の野良着のつくろひなどいたしてをります。夫もきげんよく、いつもやさしくいたしてくれますゆえ、なんにも淋しいことはございません。病気のあひだは、自分でわざわざお粥をたき、いり玉子など上手にこしらへてくれました。お料理が上手なのですね、とほめましたら、開墾中はいつでも男世帯で、なんでもやつてゐたのだもの、料理ならなんでもお前よりは上手かもしれんと笑つてをりました。ほんとに猟でとつて来た野兎など、とても凝つたお料理いたしますの。風邪をひきますまへは、毎日のやうに夫や浩造さまとごいつしよにモンペにカンジキともうすもの——これは雪に足の埋まらぬやうに、軽い木を曲げて丸いわくのやうにできたもので、これをはいてゐますと、どんな新雪の上でも足が埋まらないのです。かういふ仕度で一日に三里ぐらゐの山道を歩きまはり、野兎や狐などとりました。熊にでも出逢つたらと、お母さまのお手紙にはございましたけれど、夫はむしろそれを待つてゐるやうす、男の人は強いものでございます。十年ほどまへ、まだこの開墾地に入つて間もないころ、一年に三頭も撃つたことがございますさうで、いちど熊の肉を食べさせてやりたいなど、私が怖がりますので面白がつて浩造さまとからかふのでございます。一度、これが熊の足跡だと教へられましたが、もううつすりと雪がかくしかけた古いもので、ちようど夫の掌の形ぐらゐ、大して大きい熊ではないともうしてをりました。私にもこのごろはやつと兎と狐の足跡のみ分けがつくやうになりました。面白いのでございますよ、狐はちやんとしつぽのあとを、すいすいと雪の上に残してをり

ますの。

　春になると、すぐ畑仕事にかゝるやう今のうちから体をきたへておかなければいけないともうし、毎日かゝさず二里三里の雪道を歩かせられました。私も夫のいふことよく分りますので、いつしようけんめいです。町場からきたものは、やはりものゝ役にはたゝぬともうされては、恥かしいことでございますもの。それにこれからこの農場の主婦の役をいたしますのには、どのやうな畑のすみずみ、作物のこと、馬のこと、なんでも知つておかねばならず、第一鍬の持ちかたからして知らない私は、よほど本気にならねば一人前の百姓にはなれぬと、せいぜい今のうちから心がけてをります。それにおまきさまのお産もまぢかになり、赤さんが出来ましたらなにもかも、この家のこと、今度は私が代つてさしづいたすやうもうされてをりますので、そのこともみこまなければなりません。こゝは小田原での暮しのやうに、ちまちまと小ぎれいにといふわけにはまいりません。三升だきの鉄のお釜は、なれぬうちはなかなか持ちあがりませんでした。小田原の家の一升五合だきの銅のお釜をいつもきれいに磨きたてゝおいたこと思ひ出します。それから、十四の春でしたかあの銅の釜を三和土の上におとして、へこましてしまひ、泣きながら火吹竹でたゝいてなほしてゐるところお兄さまにみつかつて笑はれたことなど思ひ出します。こゝのお釜なら、落したくらゐではびくともいたすものではございません。あのころはまだ私、矢倉沢から帰つてまいりましたばかりでお母さまのお気持分らず、ほんとにまゝ子根性といふのだつたのでございますね。

　浩造さまご夫婦は春早々に、こゝよりはもつと北の十勝ともうすところの、只今貸下申請中の開墾地にお入りになるのださうで、辛抱してやつと住みよくしたとおもふと、また新しい開墾地に入らなければならないなんて、ひどく馬鹿げたことだと、おまきさまは冗談のやうにおつしやいましたけれど、ほんとにさうにちがひなく、私が追ひだすやうで済まない気がいたします。浩造さまも夫の手伝ひして十年も開墾のお仕事なすつたのですもの、このまゝ、この百町歩の農場の半分なり三分の一なりお分けしてあげられたらと思ふのですけれど、夫には夫の考へがあるらしく、浩造はまだ若いのだし、開墾の仕事には馴れてゐるのだから、もうひと働きしてお国のために土地を開かなければならん。北海道はまだまだ奥がひろいのだ。そして、今度は立派に独力でやつてみなければ、ほんとの北海道開拓者にはなれないのだ。と笑つてとりあげません。たゞ私ひとり済まないやうな気持でございます。

　お母さまのお手紙にございました箪笥はまだ買ひません。春にでもなつて札幌に行つたときにともうし、それまで私の名儀で銀行にあづけてくれました。この開墾小屋に、新しい桐の箪笥なぞふさはしくないやうな気がいたし、もつと暮しがとゝのつてからでもいゝやうにおもはれますけれど、おほせのとほり買ふとき買つておかないと、せつかくのお母さまのご丹誠が知れなくなつてももうしわけないことですから、そのうち折をみて必ずとゝのへます。

　二月はいちばん寒い時ださうですけれど、そんなに辛くもなく、もうあと一月もすればそろそろ雪どけになりますさうで、どんな土がこの雪の下にかくされてゐるのかと、楽しいことでございます。

　自分の勝手なことばかり書きましたが、お母さまのお体いかゞでいらつしやいませう。このあひだからもうし上げようと存じて書き忘れましたが、掘抜きの井戸端が苔で大分滑りますから、どうぞお

気をつけなすつて下さいませ。

春江がよく働いてくれるとよいと念じてをります。あのひとも、今度は私がゐないのですからほん気になつてお母さまのお手伝ひ出来るだらうとはおもひますが。

では、坪井の叔母さまによろしく。

二月二十五日　　ちよ

お母様

土がでてまいりましたのですよ、お母さま。北海道の土は黒くて、やはらかで、生きてゐるみたいなのでございますよ。裏の原始林の大きな楡の木のまはりから第一ばんに雪が消えはじめました。さういたしますと、すぐその下から去年の落葉におほはれ、しつとりと水気を含んだ土があらはれ、その土にはもう春の若草の芽が、生き生きと頭を出してゐるではございませんか。無邪気に、しかも大胆に生きてゐることを主張してゐるみたいで笑ひだしたくなるやうなのでございます。

おまきさまの赤ちやん——千鶴ちやん——によいお祝ひ着ありがたう存じました。それはそれはよろこんでゐました。私も肩身のひろいおもひで、お母さまのお心づくし身にしみてありがたく思ひました。

それから、私からとして坪井の叔母さまにいたゞいてあつた友禅でおちやんちやんを縫つてさしあげましたのは、いろいろおまきさまにお世話になつてをりますため決して決して実家からいたゞいた分が足りなかつたといふわけではないのでございます。ご相談もうしあげますにも日がかゝりますので勝手にさしあげてしまつて、お気をお悪くあそばしたのでしたら、どうぞおゆるし下さいませ。

浩造さま方の貸下地のこと、あまりはかばかしくゆかぬらしく、いろいろと厄介なことになつてをります。もつとも、あまり地味のよくないところで、浩造さまも、せめてこの土地ぐらゐの土質なら、いくら北でも開墾し甲斐があるのだが、とてもゆくゆく水田にはなりそうもないので——とあまり気乗りなさらぬごやうすなのでございます。おまきさまもやはり、こゝからお離れになりたくないらしく、赤ちやんがお出来になつたばかりなのに、新しい未開地にお入りなされるのはお苦しいに違ひないことで、出来れば私が代りたいくらいでございます。千鶴ちやんは浩造さまによく似たまる顔の丈夫さうな赤ちやんで、もう小浪におんぶされにこにこ笑ひ、家中の人気をひとりでさらつてしまひました。

けふはこれから農場の南のはづれの雲雀耕地にプラオを入れるのだともうしてをりますので私もいつしよに出かけます。この雲雀耕地といふのは夫がつけた名なのださうでございます。この村の志文ともうすのも夫が名づけ親とのこと、あなたは土に志しなすつたのに——とももうしましたら、いや俺達の子供に、ひとりぐらゐは文に志すものができるかもしれないと笑ひました。でもあのひとも和歌を作りますのでございますよ。それが性質そのまゝにかたよつてちよつと漢詩みたいなのでございますの、こんどご披露いたしませうね。ではけふはこれだけ、おからだくれぐれもご大切にあそばして下さいませ。

四月十八日　　ちよ

母上さま

たいそう忙しい毎日なのでゆつくりお手紙さしあげるひまもなく、気にかゝりながらごぶさたしました。お兄さまお具合お悪い由、こまりました。せつかくの学業も中途でお止しにならねばならぬこと、私も残念でたまりません。でも、こゝ一二年のご静養でよくおなりあそばせば、今度こそ思ひきつて、支那にでも南洋にでもいらつしやるのですから、いまのうちあせらずすつかりおなほしになつていたゞきたうございます。

もうあと一年といふところで、ほんとに惜しうはございますが、もう相当に支那についてのご勉強もおできになつていらつしやるのですもの、あとはなによりお体が大切、丈夫な体でなければ、なにひとつ初心を貫くこと出来ぬものと、しみじみこの頃は考へてをります。私もおかげさまで丈夫なのがなによりのとり得。小柄で弱々しげに見えるくせに、案外働けると、夫はじめ皆さまに驚かれてをります。なれぬ百姓仕事は、初めの半月ほどこそ、くたくたになりこんなことでつゞくかしらと、吾ながらあやぶみ、かなしくなりましたけれど、唇をかみしめてこらへてをりますうち、体も馴れ、ようりようも覚え、この頃ではさほど苦しいとも思はず、いまではどうやら二頭曳のプラオのハンドルを持てるところまでこぎつけました。ほんとにはじめのうちは、夜になると、からだぢうすきまもなしに骨までたゝかれたやうで、とても明日の朝は起きあがれまいとあやぶみました。もちろん朝になつてはいつそう苦しいのでしたけれど、モンペをはき、きやはんをつけると気が張り、またどうやらその日一日がつゞけられるのでございました。

このやうな生活に耐えられたのも、常日頃のお母さまのお心遣ひのおかげと、しみじみありがたく思つてをります。

ことに五つのときから十三の春まで、矢倉沢の山に里子に出しておいて下すつたおかげで丈夫になれたのでございます。ちよはかあいさうに、お父さまが亡くなるとすぐ里子に出されて、やつぱりなさぬ仲だから——なぞと、口さがないひとびとの言葉を真にうけて、お母さまをお恨みした日もありましたこと、いまさらもうしわけなく存じます。

胸を患らつて亡くなつた生母の体質をそのまゝ受けた私を、どうかして丈夫に育てあげたいとのご苦労も知らず、生れた家でわがまゝいつぱいの春江を羨み、家に帰つてからさへとき折りは、すねておみせしたり、ほんとに悪い私でございました。

今度の結婚のことも、なにもえりにえつて流刑のひとの行く北海道くんだりまで追ひやらなくとも——などゝ、意地悪くそんな意味のことをいふひともありましたのに、亡くなつたお父さまは以前から拓殖の志のあつた方だ、箱根の仙石原を開墾して楮の木を植ゑ初めなすつたり、鴨の宮の池を埋めて造田の計画をおたてなすつたりなすつた方だ。お父さまはおまへが北海道の開拓者の妻になれば、ご自分の志をつぐものとおよろこびなされるであらう。と、反対を押しきつてきつぱり今度のはなしをきめて下さつたお心も、今にしてはつきりうなづけるのでございます。

こゝの春はむせるやうな生々したものでございます。お母さまにこの落葉松の緑玉を粉にしてふりかけたとしかみえぬ新芽をお目にかけたうございます。裏の原始林には夜の白々あけから、くろつぐみや山鳩がなき、見渡すかぎり山ぎはまで続く農場の耕地には作物がまかれました。とりいれの日の素晴しさを想ふだけでも胸がいつぱいになります。この広い耕地を十年十五年の後にはすつかり水田

にする積りだと夫はもうしてをります。夫はまだまだ開墾して畑になつたゞけでは満足してゐないやうすです。只今はこちらでは水稲は殆ど作つてをりませんが、いまに風土に合つた稲の品種改良がされゝば、きつと、内地のやうな水田にして、北海道で使ふお米は北海道でまかなへるやうにしなければならないのだなどゝ、夢のみたいなことを考へてをります。ほんとにお父さまが丈夫だつたらどんなにかお気が合ひ、よいお話し相手であらうと思ひます。

なにかくどくどゝ書いて大切なこと忘れるところでございました。どうぞお叱りにならないでおきゝ下さいまし。それは、あの箪笥を買ふために下さいました百五十円のお金、実は浩造さまの土地のことで、どうしてもお金が足りず夫も心配してをりましたので、さし上げることにいたしました。

十勝の方の土地がなかなか道庁からの貸下げ許可がおりませんで、困つてをりますやさきに、雨龍と申しますところの本願寺所有の未開地が開放され、安く売りにでたのでございます。夫は、おまへの金は必ず返しお母さまのご丹誠の箪笥を買つてやるといひますが、私といたしましては、お母さまさへお許し下さいますのなら、箪笥なぞほしくはございません。私のせめてもの心づくしに、浩造さま方が十勝よりもずつと暖かで地味もよいといふ今度の開墾地を手に入れなされ、他日成功なさりさへすれば本望でございます。ものごとのほんとの意味、ほんとのよいことをお分りになるお母さまには、きつとよろこんでいたゞけるとおもひますので、私、かくさずおしらせいたすことにいたしました。ちよはもう他人の家のもの、それで勝手なことをいたしたとお腹立ちのございませぬやう、大変急なおはなしでしたのでお母さまにお問合せのひまもなく、このやうな大それたこと、ひとりぎめいたし、なにか心さわぎますけれど、どうぞお許しあそばして下さいませ。お母さまからいたゞいたお金でちよが日本の国土をひらくお手伝ひいたしたとおぼしめして、どうぞお叱りにならないで下さいまし。

浩造さまも、おまきさまも、大そう感謝され、それはそれはご満足なご様子で、二三日うちに雨龍の開墾地にお入りになります。小浪がごいつしよに行くことにきまりました。おまきさまに、なにやかとお頼りもうしてゐましたので心細くなりますし、千鶴ちやんも可愛くなつてまいりましたのに急に淋しくなることでございませう。

内地はもう青葉でございませうね。いまごろ、お庭のさつきがさかりのころ、あの赤い色や、庭石のたゝずまひ、かうしてゐても目にみえるやうです。北海道はこぶしの花が満開でございます。こちらでは、こぶしのことを四季桜と呼んでをります。桜は五月なかばを過ぎなければ咲かないさうでございます。そのかはり、梅も桃もりんごの花もみんないつしよに咲くのださうでそのみごとさがおもひやられます。

梅雨になりますと、またお体のお具合お悪くなられはしまいかと案じられます。どうぞおいとひ遊して下さいませ。お兄さまくれぐれもお大切に。

この手紙のご返事切にお待ち申してをります。

五月二日　　ちよ

母上さま

青空文庫情報

底本：「ふるさと文学館　第一巻　【北海道1［＃「1」はローマ数字、1-13-21］】」ぎょうせい
　　1993（平成5）年7月15日初版発行
底本の親本：「風の街」白都書房
　　1946（昭和21）年
初出：「戦時女性　6」
　　1944（昭和19）年
入力：鈴木厚司
校正：noriko saito
2007年4月4日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

早春箋

辻村もと子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/